

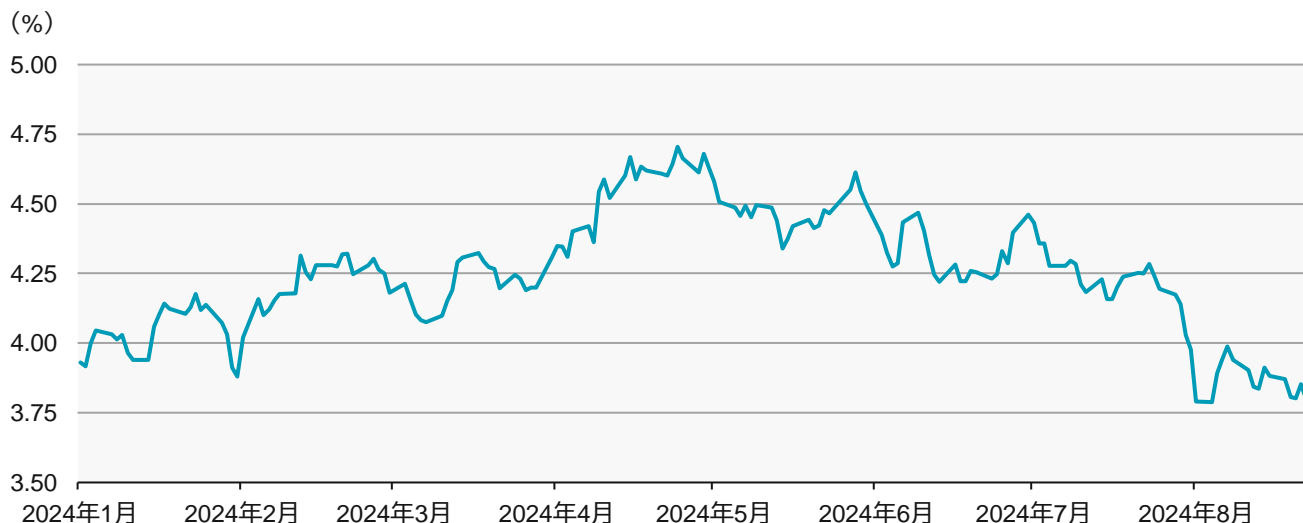
FRB(米連邦準備制度理事会)のパウエル議長は、2024年8月23日のいわゆるジャクソンホール会議の講演で「政策を調整する時が来た」と述べました。政策の調整とは、政策金利の引き下げです。これ自体は想定の範囲内ですが、そうであろうと思う内容が実際に示されて、米長期金利は低下、米ドル(対円)レートは2円程度の米ドル安・円高となりました。くれぐれも、市場は9月利下げの可能性が高いと前もって知っていたのですが、それが確定的になったことを改めて価格に織り込んだことになります。

米国株式は、政策金利の引き下げがより確かになり、ソフトランディング(景気減速、低めのプラス成長)のシナリオの可能性が高まったことなどから上昇しました。また、2024年4月頃から米長期金利は低下傾向にあり、利下げを織り込む方向でしたので、今回の金利低下は8月以降の取引レンジの中での動きです。米ドル(対円)は、円キャリー取引の巻き戻し(ボラティリティが高まるポジション整理の動き)などが出やすい状態で、大きめに動いたように見えます。

FRBが政策金利を引き下げ方向に調整することは伝わってきましたが、いつどの程度調整するのか、9月に0.25%ポイント程度引き下げるとしても、11月、12月でも引き下げるのか、などについて新しい情報があるということではありません。これらは、今後の経済統計、特に雇用とインフレ率に関わる統計に依存します。

日本株式にとって、米国景気のソフトランディングは輸出産業にとって好材料、円高は当面の悪材料と考えられます。ただし、このところの日本株式は、米国の安定した経済以上に、国内賃金の上昇、消費や設備投資の回復期待など、米ドル(対円)の水準以外に依存する好材料を待っています。今後、日本株の為替離れが期待されるので、円高に一喜一憂せず資本市場への長期投資のスタンスを維持してよいでしょう。

[米長期金利の推移](2024年1月2日~2024年8月23日)



信頼できると判断した情報に基づき、日興アセットマネジメントが作成 米長期金利:米国10年国債利回り
※上記は過去のものであり、将来の運用成果を約束するものではありません。